

# ローム層中に見られる逆転層の存在 とその意味について

岩 崎 泰 一

## は じ め に

70年代前半に開始された上越新幹線・関越自動車道関連の調査も83年度をもって一応終了し、県内では10数カ所に及ぶ遺跡の整理が一斉に行われている。これらの調査によって得られた所見の一部はすでに公表されているが、今後、報告書が刊行されていくことにより様々な問題が提起されていくことは想像に難くない。一方、県下ではいたるところで、膨大な面積を対象とするほ場整備事業が実施されており、地域の実体が遺跡の消滅という代償として<sup>(1)</sup>に明らかにされつつある。

こうした状況下にあって、これまでその実体が不明であった先土器時代遺跡も赤城山南・西麓をはじめとして、県内各地より10数カ所に及ぶ遺跡の調査が実施され、今後、詳細な分析が行われるものと思われる。

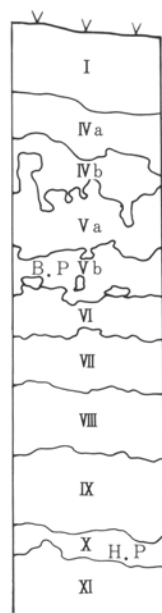
本稿は赤城山南・西麓<sup>(2)</sup>に所在する下触牛伏遺跡、勝保沢中ノ山遺跡に見られたローム層中の逆転現象の存在の意味と、それから派生するいくつかの問題について若干の指摘を行うものである。<sup>(3)</sup>

## ローム層中の逆転現象の具体例

### a. 県内事例

#### 下触牛伏遺跡（佐波郡赤堀村大字下触）

遺跡は赤城山南麓端部に位置する。赤城山は北東側の足尾山系と接する部分を除いて広大な裾野を形成している。これらの地域では標高500m付近で、山地形から丘陵性地形への変換点が見られる点で共通する。北・西麓では片品川、利根川等の河川による浸蝕を受け、その末端部が段丘状となり、また、山麓から湧出する小河川による深い開析谷が形成されている。これに対して、南麓は南西・南東側を旧利根川及び旧渡良瀬川による浸蝕が一部に見られるものの、標高200mより下位の地域では低台地化した地形観を呈し、他にくらべて湧水等による開析が顕著である。遺跡の周辺は山麓より湧出する小河川による開析が著しく、小規模で複雑な沖積地が形成され、遺跡はこうした沖積地に挟まれた南北に細長い



第1図 下触牛伏遺跡  
基本土層図（S=1/30）

文時代前期住居址 3 軒、土壇50余基、古墳時代後期住居址13軒、同後期古墳11基が、他に縄文時代創草期・早期・中期・後期の土器・石器類が出土している。

基本土層（第 1 図） 観察された土層の堆積状況は付近のそれと一致し、南麓における標準的土層となるものと思われる。Ⅰ層・耕作土。Ⅱ層・黒色土層（浅間C軽石を混入）。Ⅲ層・暗褐色土層（ローム粒子をブロック状に混入。Ⅱ・Ⅲ層は古墳盛土下にのみ観察された）。Ⅳ層・軟質ローム層（若干の粒度・色調の差により細分。上層はより風化が進んでおり、創草期爪形文をはじめ各型式の土器が混在して出土する）。Ⅴ層・硬質ローム層（上半部の白色パミスと下半部の板鼻褐色軽石層のブロックを特徴として細分。分層は色調の明暗による）。Ⅵ層・橙色ローム層（台地平坦部では安定して堆積しているが、傾斜部では軟質となり安定感に欠ける）。Ⅶ層・茶褐色ローム層（所謂「暗色帯」で上位部分にA・Tの極大値をもつ）。Ⅷ層・褐色ローム層。Ⅸ層・褐色ローム層（Ⅷ層に比べて硬質で、黒色粒を混入）。Ⅹ層・八崎軽石層（H・P）。

ローム層中の逆転現象 今回の調査で観察されたローム層中の逆転現象は10数カ所に及んだ。これらのローム層中の逆転部の調査は時間的な制約もあって完掘し得たのはわずかであり、ほとんどは断面観察にのみ終わった。埋没土層と遺物の出土位置の関係等充分検討することができなかった点もあり、今後、調査方法の検討の必要性を痛感している。断面の観察及び確認状態よりローム層の逆転現象が形成された時期にバラエティーを把握することができた。ローム層中の逆転現象の形成された時期がⅣ層中にあるもの、Vb層中にあるもの、Ⅶ層あるいはⅧ層中にあると考えられるものである。形状は、不整円形を基調とし浅い皿状を呈するもの、中央部が高く周辺が深い溝状を呈するもの、スリ鉢状を呈するもの等が認められた。

第 3 図 1 は調査区南端の断面に観察されたもので、ローム層の逆転現象の形成時期がⅣ層中にあるものである。一部、縄文時代の土壇によって切られている。そのため、流入した埋没土層の状態は明確にし得なかったが、Ⅶ・Ⅷ層より上位のローム層の逆転現象が明確に見られた。形状は長径 3 m 余・深さ 1 m 程の楕円形を呈するものと思われる。底面の状態は若干の凹凸が認められた。第 3 図 2 はⅧ層上面で確認されたものである。形状は長径 2.08 m・短径 1.76 m・深さ 0.3～0.5 m を測る不整円形状を呈している。断面形は中央部が浅く、北側を除く周辺部が深くなっている。埋没土層は八崎軽石層をとりこんだⅦ・Ⅷ層がブロック状に堆積していた。なお、一部石器ブロックと重複しており、埋没土層上位部分より剥片類が出土している。

勝保沢中ノ山遺跡（勢多郡赤城村大字勝保沢）

遺跡は赤城山西麓に位置する。遺跡の所在する台地は山麓より湧出する小河川の開析により東西方向に細長い丘陵性台地となっており、遺跡調査区内には原形面形成時の凹凸による高まりや、沖積世の古い段階で形成された高まり等が見られ、起伏に富んだ地形観を呈している。検出された遺構・遺物は先土器時代文化層 2 枚、縄文時代前期住居址、土壇、古墳時代中期住居址、階段状遺構、奈良時代土壇墓等がある。

基本土層（第 2 図） 土層観察用の深掘りは、八崎軽石層（H・P）までを確認している。

観察された土層の堆積状態は付近のそれと一致し、西麓における標準的な土層<sup>(5)</sup>となっている。本地点では確認されなかったが、八崎火山灰層<sup>(6)</sup>(H・A)と呼ばれる降下軽石層が広範囲に分布していた。VII層以下がローム層となっている。VII層・黄褐色ローム層(白色パミス混入。比較的硬質で上面は激しいクラック帯をなす)。VIII層・浅間白糸軽石層(S・P)。IX層・褐色ローム層。X・XII・XIV層・板鼻褐色軽石層(B・P)。XI・XIII層・褐色ローム層。XV層・茶褐色ローム層(B・Pを若干混入。含カーボン)。XVI層・茶褐色ローム層(上位部分にA・Tの極大値、部分的にA・Tの純層を確認)。XVII層・茶褐色ローム層(灰白色の軽石をわずかに混入し上層よりもやや黒味を増す。所謂「暗色帯」か)。XXI層・茶褐色ローム層(灰白色の軽石を混入。上層よりも明るい色調を呈す)。XXII層・八崎軽石層(H・P)。

ローム層中の逆転現象 今回の調査で観察されたローム層中の逆転現象は、そのほとんどがXV層より下層に存在した。唯、確認面はXVII層上面であったりXVIII層上面であったが、こうしたローム層中の逆転現象の形成時については必ずしも明確にし得なかった。形状は断面形がスリ鉢状、あるいは皿状を呈するものがほとんどであった。

第3図4はA区中央部付近で検出されたもので、XV層が確実に落ち込んでいた。断面観察の結果XVIII・XIX層より上位のローム層が逆転し、XV層が流れ込むかのように埋没していた。長径1.84m・短径1.72m・深さ0.36mを測り、断面形はスリ鉢状を呈していた。遺物は出土していない。

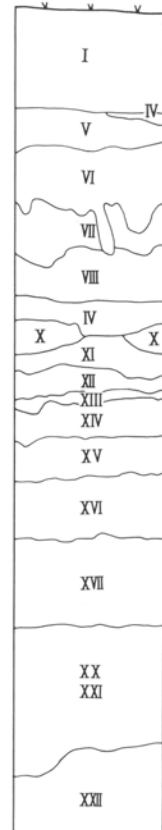
第3図3はA区南西部付近で検出されたもので、近接して2カ所の石器ブロックが存在する。XVI層上面で検出された。断面観察の結果、XVIII・XIX層より上位のローム層の逆転が見られた。長径1.36m・短径0.88m・深さ0.28mを測り、断面形はスリ鉢状を呈する。遺物は底面から約10～15cm浮いた状態でナイフ形石器1・剥片2点が出土している。これらの出土遺物はXV層が流れ込んだと思われる流入土中より出土している。

#### b. 県外事例

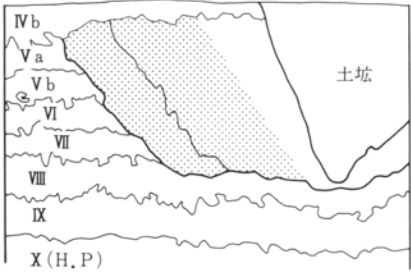
ここで取り上げたローム層中の逆転層の存在に言及した文献はほとんどないと思われるが、類似した状況(埋没土層・完掘状態等のあり方)にあるものを、これまで管見にふれた報告の中から抽出したい。

<sup>(7)</sup>  
東京都多聞寺前遺跡1号土坑

本例は台地平坦部のVII層上面で検出された。平面形は楕円形状を呈し、長径1.36m・短径1.12m・深さ0.28mを測り、断面形は皿状を呈している。埋没土層は6層よりなる。報告者は土坑の検出層位と検出された文化層の関係・石器ブロックとの位置的な状況から人為的要因、つまり、遺

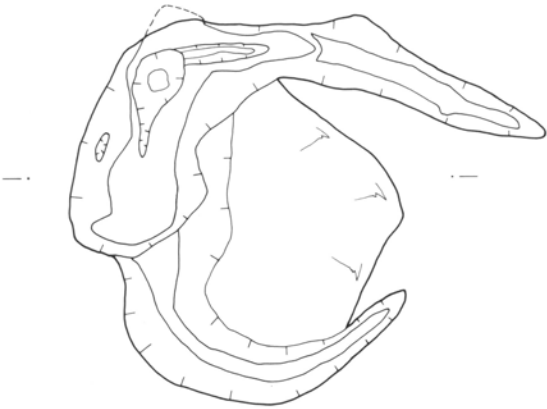


第2図 勝保沢中ノ山遺跡  
基本土層図(S=1/40)

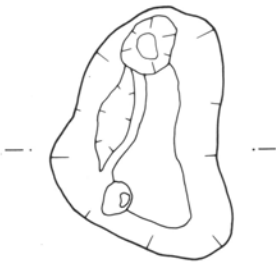


1

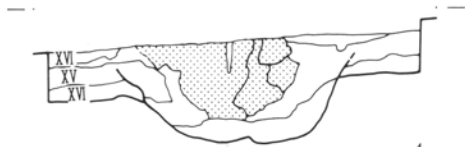
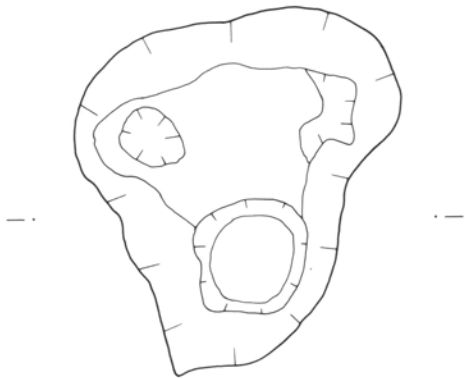
下触牛伏遺跡例



2



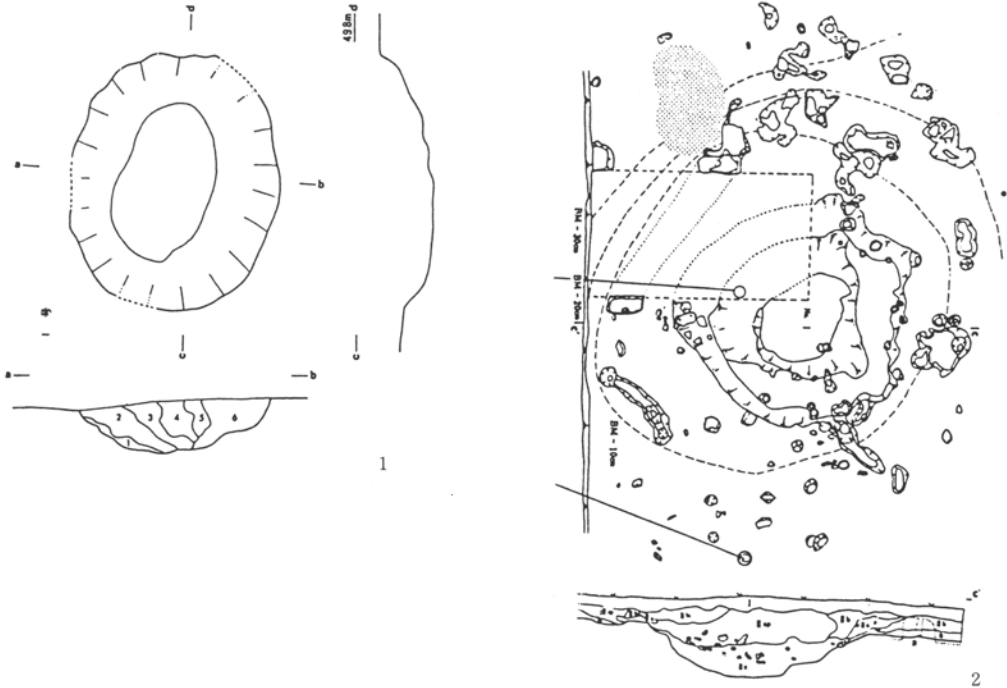
3



4

勝保沢中ノ山遺跡例

第 3 図 ローム層中の逆転現象 (県内事例) (S= 1 / 40)



第4図 ローム層中の逆転現象（県外事例）

構の可能性を薄いものと考えているようであるが、最終的には人為的・自然的要因のどちらにも態度を保留している。ここで問題となるのは、「覆土」の項の中で「下位に位置するIX層とよく似た土質」がVII層上面の平面精査の段階で観察されたことであり、埋没土層が「レンズ状堆積」を示していない点である。6層に分層された埋没土のうち、1・2層は流入土である。「同一視できそう」な2・6層に挟まれた3～5層がIX層に近似する点で、県内二遺跡検出例と同様な埋没土層のあり方を呈しているものと思われる。この他に2基の土壇が示されている。これらは検出層位・石器ブロックとの位置関係・遺物の有無から人為的遺構として扱われている。3号土壇については土層の堆積状態が示されていないので不明であるが、2号土壇に関しても土層の堆積状態・完掘状態から人為的要素は認められないものと思われる。

(8)  
鹿児島県上場遺跡1号住居址

報告書の刊行されていない段階で不明な点も多く本例を取り上げるのは妥当でないかもしれないが、遺構であるか否かについて議論をするうえで、基礎資料となりうるものと思われる。以下近接して検出された2号住居址とともに分析・検討を行ってみたい。

住居址は丘陵性台地のIV層上面で検出された。報告者は遺構外縁部の安山岩礫石・柱穴・土堤状施設および遺物の出土状況などから住居址および周辺の空間利用を示すものと把握している。

住居址の規模および形状は 1 号住居址：長径 4.0m・短径 3.41m・深さ 0.7m、2 号住居址：長径 6.5m・短径 5.25m・深さ 0.5～0.6m を測り、形状は各々不整円形状を呈している。1 号住居址は部分的にテラス状の平坦部が見られるものの、スリ鉢状を呈するのに対して、2 号住居址はわずかに凹凸のある広い平坦部を有し、壁は緩く立ち上がっている。2 号住居址は柱穴をほとんどたないが、1 号住居址には住居址内外に多数の柱穴が見られる。埋没土層のあり方は 2 号住居址については不明であるが、埋没土層の示されている 1 号住居址では、IIa 層がかなり乱れた状態で堆積していることが認められる。以上が報告された住居址の概要であるが、住居址の規模・形状を除いて、共通する要素の少ないことが理解される。本例から直接ローム層中の逆転現象を説明することはできないが、少なくとも完掘状態に見られる諸要素からは住居址と判断する積極的な根拠に乏しいものと思われる。

### ローム層中に見られる逆転層の意味

これまで報告された中にもローム層中の遺構<sup>(9)</sup>として明らかにそれと断定されるものは、意外に少ないのではないと思われる。多くの場合埋没土層については表記していない事例が多く、土層の検討を報告書の中から行うことは困難であるが、形状が著しく不整形であり、ローム層が堆積する際の環境を勘案しても人為的所産としての遺構として把握するには躊躇せざるを得ない。私たちは遺構検出のための努力を全く怠っていたということではなく、むしろ、様々な努力を他の時代の遺構検出にもまして行ってきたと言える。にもかかわらず、明確に遺構として扱えられるものは該期調査例に比べて極めて少ない。こうした要因には、社会的・経済的形態を反映した遺構の量比の問題は別として遺構が構築されなかったということではなく、遺構・遺物が含まれているローム層中から視覚的に遺構を把握することの困難な点に集約されるものと思われる。本稿でとりあげたローム層中に見られたローム層の逆転現象の存在は、すでに指摘されている「風倒木痕」<sup>(10)</sup>と同様な現象として理解することができる。それは遺跡調査に際して観察される埋没土層のあり方、及び、完掘された形状という点に関しての現象である。こうしてローム層中の逆転現象を「風倒木痕」と判断するわけで、そこには遺物の有無などといった事象は全く判断材料となり得ない。現状でローム層中から人為的所産としての遺構の検出が困難であることを考え合わせれば、ローム層中の逆転現象がわずかながら他地域にも認められたことは「風倒木痕」の形成される要因から推定して全国的に分布の広がる可能性が高く、また、形成された時期にパラエティーが認められる点においても、自然営力を反映した所産であるとされる「風倒木痕」として扱えても何ら矛盾は生じ得ないものと思われる。

今後の先土器時代研究は、これまでの研究史上の成果に立って発展的に展開していくことは言うまでもない。それは接合資料・母岩別資料を抽出することによって、厳密な意味での同時性をもつ石器群を動的に把握する可能性をもつものであると言える。唯、母岩別資料の完全な把握が困難であることは誰もが認めようし、そこから抽出された石器群の動態にはおのずと限界がある

ものと思われる。また、周水河現象等による遺物の移動、遺構構築による人為的移動の他に、ここで指摘したローム層の逆転現象による移動も十分に考慮すべきであり、単位石器群の把握には諸々の作業段階を経てもなお不確定要素を払拭し得ないことが理解される。調査区内から出土した石器群の分析をとおして得られた情報には様々なレベルの情報があることを、報告する側もされる側も認識し、留意すべきかと思われる。

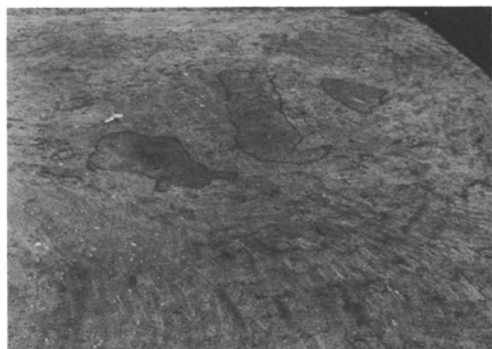
## お わ り に

本稿は、所謂「風倒木痕」と同様な現象がローム層中にも存在することの事例報告であり、それから派生するだろう問題点について若干の私見を述べてきた。ローム層中の「風倒木痕」の存在は、これまで花粉分析をとおして知られてきた植生のひとつの証しであろうし、人々をとりまく観景のひとつであったと思われる。同時に、それは当時の経済活動のひとつにとりこまれていたことが予想されるものである。今後は今回の調査の不備な点を補いつつ、ローム層中の逆転現象と遺物の関係を具体的に例示してみたいと思っている。

なお、本稿を草するにあたり、能登健氏には種々の御助言をいただいた。また、掲載資料の公表について承諾をいただいた関係諸氏、及び、図版作成等協力を願った田村栄子・保坂雅美・長谷川春美の諸氏に記して感謝いたします。

## 註

- (1) 能登健・中東耕志・原雅信・相京建史・右島和夫・飯田陽一「群馬県における地方史研究の動向・考古」『群馬文化』第200号1984年
- (2) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報3』 1984年  
県立博物館「遺跡は語る—最近の発掘調査の成果—」第17回企画展図録 1984年
- (3) 群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報2』 1983年
- (4) 新井房夫他「テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』 1984年
- (5) 谷藤保彦「最近の先土器時代の遺跡調査から—房谷戸遺跡のローム層について」『埋文月報』35 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983年
- (6) 赤城山西麓における関越自動車道関連の遺跡間に共通して検出されたものである。軽石層と灰層より構成され、給源は榛名山であると思われる。新井房夫氏によれば、以前「Ag-KP」（鹿沼軽石層）と並行するものとして「K・P」と称していたものと同一である。
- (7) 鶴丸俊明編『多聞寺前遺跡発掘調査報告書II』多聞寺前遺跡調査団 1984年
- (8) 池水寛治「鹿兒島県・上場遺跡」『日本考古学年報28』1975年
- (9) 鈴木忠司氏によれば、これまでに発見された遺構は礫群・配石を除いて54カ所にのぼるとされている。これらの中でも明確なものは少なく、とりわけ住居の構築を一般化することは困難であるとされている。  
鈴木忠司「旧石器人のイエとムラ」『季刊考古学4号』 1983年
- (10) 能登健「発掘調査と遺跡の考察—いわゆる性格不明の落ち込みを中心として—」『信濃』第26巻3号 1974年



勝保沢中ノ山遺跡 風倒木痕 確認状態  
XVII層上面で確認されたXVI層の落ち込み。北側から。



勝保沢中ノ山遺跡 風倒木痕 土層堆積状態  
上面はXIV層を除去した状態。白色軽石（八崎火山灰層）を含むローム層の逆転現象。



勝保沢中ノ山遺跡 風倒木痕 土層堆積状態  
白色軽石（八崎火山灰層）を含むローム層の逆転現象。  
南側から。



下蝕牛伏遺跡 風倒木痕 土層堆積状態  
VII・VIII層より上位のローム層の逆転現象。土層観察  
用のトレンチより確認された。



勝保沢中ノ山遺跡 風倒木痕 完掘状態  
流入土（XV層）中よりナイフ形石器1、剥片2が出土  
した。西側から。



下蝕牛伏遺跡 風倒木痕 完掘状態  
周辺が溝状に落ち込む例。VIII層上面で確認された。